

萬病萬毒論と萬病一毒論

西巻 明彦

北里大学東洋医学総合研究所医史学研究所／日本歯科大学新潟生命歯学部 医の博物館

萬病萬毒論は橋本伯寿の学説、萬病一毒論は吉益東洞の学説である。富士川游氏によれば「吉益東洞が主張せるところは、万病唯一毒なり。その毒の所在を見て治療を加え、あえて病の因を論ぜず。飲食口に入りてもし留滞するときは、すなわち毒となる。百病これにかかり、諸証これより出ず。外邪襲い來たるといへども、その毒なきものは入らず、と云うにあり。萬病唯一毒なるがこれを治すことを毒を去ることを要とす。薬もまた毒なり。毒を以て毒を攻む。毒去れば病治すべし。死生は命なり。天よりこれを作す。医もこれを救うこと能ず。」と記している。この典拠となっているのは、吉益東洞の『古書医言』であり、「萬病一毒、衆薬みな毒物、毒を以て毒を攻む。毒去りて体始めて佳なり。初め元氣に損益なし。何ぞ補を云わんや」である。この前段階として後藤良山の「一氣留滯説と運氣説の否定、香川修庵にいたっては、『素問』、『靈樞』などもかなりの部分を否定し、もっぱら親試実験を行なって疾病に対して薬効があるかどうかを主張している。さらに修庵は『行余医言』の中で、「我より古を作る」とすら述べている。このような中国医学理論の否定は、吉益東洞にも大きな影響を与え、今日に至るまでさまざまな波紋を投げかけることになる。

萬病一毒論に対する批判は後藤慕庵が、良山の言は拠あれども東洞の医説は根拠がないと批判し、畑黄山、望月鹿門らも反対している。同じ古方派でも永富独嘯庵は「洛下土流の論、悉くその頂門にあたる。吉周輔、豪傑の勇ありて豪傑の智なし、その古医方を以て自任する薬狐の祥なり。」と東洞を激しい言葉で非難している。内藤希哲は、古方派でありながら『医経解惑論』の中で傷寒内経一貫説を主張している。この『医経解惑論』の序に太宰春台は「仲景の方は内経に依る。而して内経は医方の本たり。故に内経に通ぜざれば以て方を為すことなく、仲景を学ばざれば以て経を験することなし」と述べ古方派と言へどもさまざまな立場があったことが判明する。

橋本伯寿は『断毒論』の中で伝染病という名称を記し、また痘瘡、麻疹、梅毒、疥瘡の四病は毒力が強く海外からの伝染病で人から人へ接触により発症することを主張している。伝染という用語そのものは、香川修庵の『行余医言』に「此の疾、伝染するものあり」と記されている。伯寿の萬病断毒論は、人を傷すものは風寒中の疹気であるとし、さらに体には、天稟の毒気があり、その毒気と外毒が結合することにより、病が発症するとしている。つまり、外部から毒気は萬ずの毒気があり、体の内部には天稟の毒気が体毒として存在し、これが氣中を流れ、病の毒として萬毒あると規呈している。例えば、痘瘡の毒気が外部から体内に侵入し、体内にある痘瘡の毒に感応して始めて痘瘡が発症するという理論である。伝染は体内にある毒の有無で決まり、解毒は正気の大小及いは病状に影響する。通常、一生のうち一回しかかからない疾患と何回も罹患する疾患は、萬病萬毒論によれば、体の中で内外の毒が感応して内毒がすべて消失すると再び外毒が入ってきても発症することはないが、内外の毒が感応しても内毒が残っているならば、外毒が入ってくると再び発症する。

萬病一毒論と萬病萬毒論の差異は、内毒を東洞は一毒とし、病因について言及しなかったことに対し、伯寿は内毒を萬毒とし外邪も多くの毒気があり、この感応が発症と密接な関わりがあると規呈したことである。伯寿も東洞も「薬も毒物也」とした点、天命説など共通点もあるが『断毒論』の中で、「近頃一派の医流、謾に萬病一毒の説をなして多くの人をまよわせり。」と東洞を批判している。伯寿は、代々古方派である医家の出身で、江戸・長崎に遊学し、吉雄耕牛、中野忠雄らにより蘭学を学んだ。『断毒論』は19世紀初めの出版であり、フルブリュケの『海陸外科備要』の影響を受けているといわれ、痘瘡、梅毒が伝染することを唱えたのも、この本に因っていると言う。伯寿は蘭学と従来からの伝統医学の両方を学んでいたため、『断毒論』は蘭学の伝染病を説明するため、毒という概念を中心に『内経』の理論を用いて解説するという独特な病理観を呈している。